



# 木炭

もくたん



## 概要

木炭は、樹木の枝や幹を棒状に小割にしたものを炭化させ、デッサン用の描画材としたものです。材質が柔らかいため、繊細な調子や濃淡表現、ボカシなどの描画効果を比較的容易にもたらし、単色の色材ながら豊かな表現が可能です。

木炭の原料には、柳や桑などの枝部分、栗や樺の木、榛(はん)の木の幹を小割にしたもの、蔓草(つるくさ)の茎などがあります。これらをしっかり乾燥させ容器で密封し、窯で600℃以上で加熱することで純度の高い炭素成分の木炭となります。

それぞれ樹木の種類や焼成具合によって、硬軟や濃淡などの描画特性が大きく異なります。また同じ種類の木であっても、樹齢や生育環境などにより性質が若干異なる場合もあります。木炭は鉛筆と異なり、光沢や硬度が無くもろいため、描画すると摩耗し粒子状になって描線となります。また、木炭粒子を支持体に定着させる成分を含まないため、描画した部分は非常に剥落しやすくなっています。しかし、定着が弱いことで、布や指などを使って木炭の重ね具合を微調整でき、繊細で奥深い表現が可能になります。また、木炭紙と呼ばれる専用紙を支持体にする、紙特有の柔らかな風合いと紙肌(溝状の凹凸がある)により、木炭の定着を良くし、様々な表情を効果的に引き出せます。

木炭の使用時は、紙を傷めないように描き進めることが大切です。筆圧を抑えるクッションとして、必ず4~5枚程度の木炭紙を下に敷きます。塗り重ねる際は、一度塗った木炭を布で慣らしたり、指の腹などで軽く押さえるなどしてから(紙肌の凹部に入れ込むイメージ)、再度塗ることによって濃度を上げていきます。また、描画した部分を消す時は、練りゴムや指で強く擦り過ぎると紙面の凹凸が潰れてしまうため、食パンや柔らかい布を使用しましょう。

木炭は最も古い筆記具と言え、人類がはじめて形や記号を描こうとする意思を持った時、最も手短かであったと考えられます。現在の「木炭画」と呼ばれるようなものは、14世紀中頃、西洋の製紙技術の発達とともに現れ、ダ・ヴィンチやミケランジェロが描いた作品などが現存して

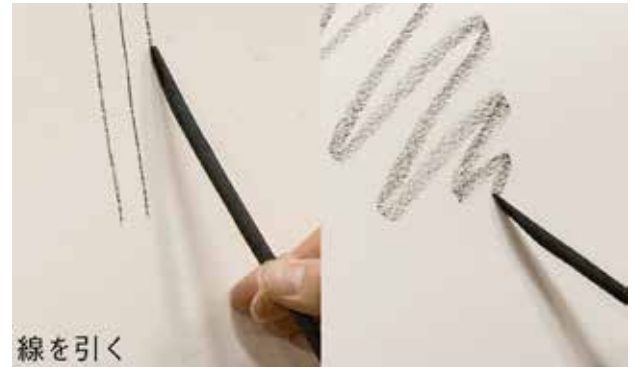
あ  
か  
さ  
た  
な  
は  
ま  
や  
ら  
わ  
A  
B  
C  
D  
E  
F  
G  
H  
I  
J  
K  
L  
M  
N  
O  
P  
Q  
R  
S  
T  
U  
V  
W  
X  
Y  
Z  
数字

います。

取り扱いの注意として、柳や桑などの枝材には芯があり、芯部分は紙に定着し難く、色味も変わってしまうため、芯抜きで取り除いてから使いましょう。また、木炭は大変色が落ちやすいので、完成後はフィキサチーフなどでしっかり定着させましょう。

木炭は、一般的な画材店で購入できます。

### 木炭の描画例 (MBM 木炭紙 厚口)



線を引く



寝かせて塗る



指で押さえる



手のひらで押さえる

### 基本的な持ち方



木炭の先端





木炭（ヤナギ）による濃淡・調子の変化  
（MBM 木炭紙 厚口）



木炭

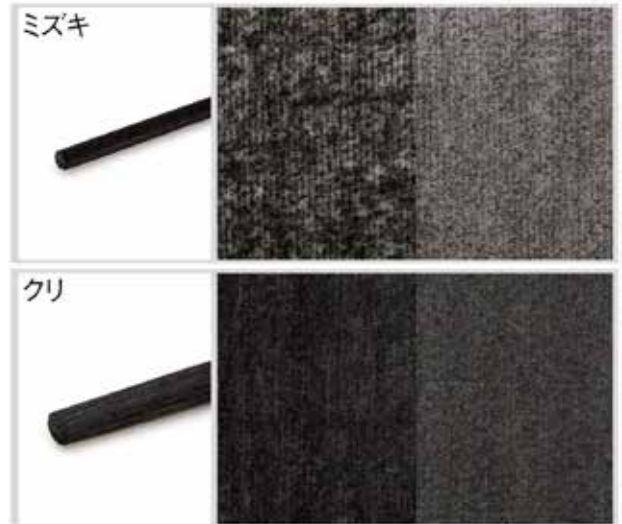
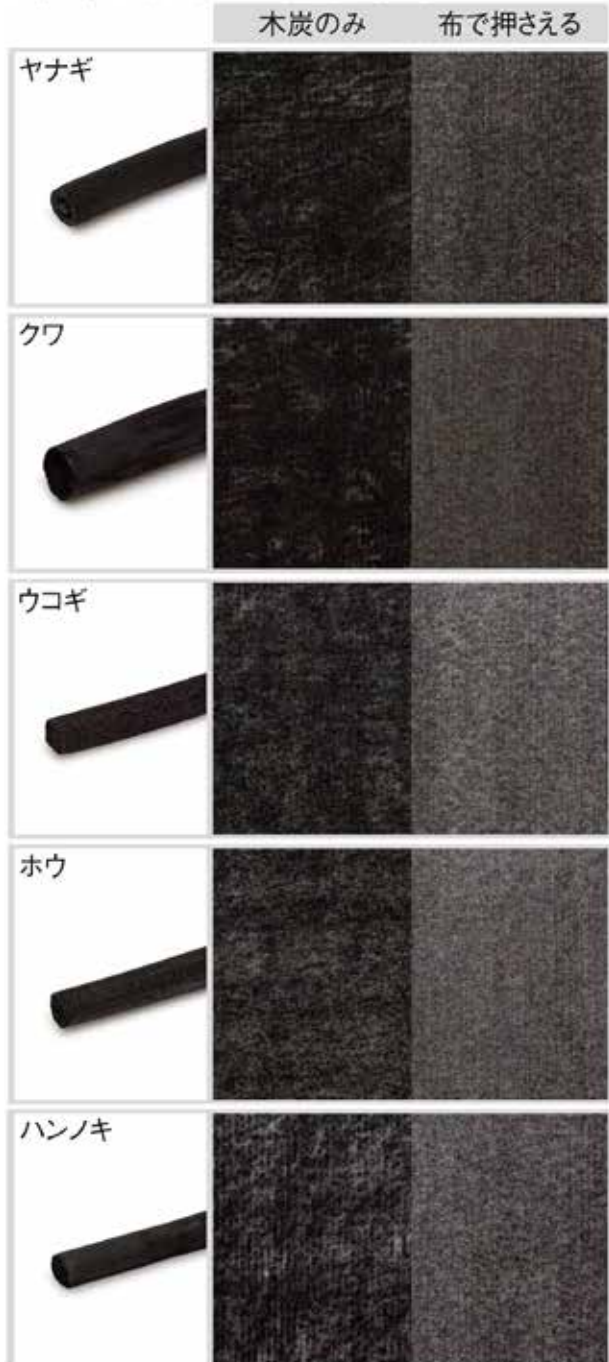


木炭（指で押さえた場合）



木炭（布で押さえた場合）

種類別描画例 (MBM木炭紙 厚口)



あ  
か  
さ  
た  
な  
は  
ま  
や  
ら  
わ  
A  
B  
C  
D  
E  
F  
G  
H  
I  
J  
K  
L  
M  
N  
O  
P  
Q  
R  
S  
T  
U  
V  
W  
X  
Y  
Z  
数字